投稿論文

「拒食症のドラマ」の精神分析
――スティーヴン・レヴェンクロン『鏡の中の少女』における身体イメージの歪み、眼差し、欲望

大木龍之介*

本稿ではスティーヴン・レヴェンクロン『鏡の中の少女』（1978=1987）をラカン派精神分析と美を論じるフェミニズムの立場から分析し、拒食症（神経性無食欲症）の診断的特徴である「身体イメージの歪み」を再考する。摂食障害、特に拒食症の表象の多くは、「歪んだ」身体イメージを抱え、自分自身を「客観的」に、「正しく」認識できない少女の姿を描き出す。しかしそのような「歪んだ」身体イメージが、痩身を美と結びつける身体規範、即ち「客観的」で「正常」な眼差しによってもたらされること、また主体が自らの身体を「客観的」に捉えることが根本的に不可能だということを踏まえると、「客観的な視点＝正常／罹患者の視点＝病的で逸脱」という二項対立は疑問に付されることになる。本稿では『鏡の中の少女』の「拒食症のドラマ」が描く身体イメージの歪み、眼差し、欲望の読解を通じて、「客観的」で「正常」な眼差しそれ自体の問題点と「歪み」を明るみに出す。

キーワード
摂食障害、拒食症、身体イメージ、精神分析、『鏡の中の少女』

Ⅰ．はじめに

バレエのレオタードを着た二人の少女がいる。二人はほとんど同じ姿だが、体型に違いがある。左側の少女と比べて右側の少女は横幅が広く、「太って」見える。また右側の少女には、左手がない。われわれが鏡を見る時と同様に、それが映り込むだけの十分な空間がないのだ。そこでわれわれ鑑賞者は、右側の少女が左側の少女の鏡像であり、それが横に引き伸ばされ「歪められて」いること、つまり彼女の「本当」の姿でないことを悟る。

心理療法士のスティーヴン・レヴェンクロン（Steven Levenkron）によるヤングアダルト小説、『鏡の中の少女（*The Best Little*

*椙山女学園大学講師

DOI：10.24567/0002003772

Girl in the World)』(1978=1987) のペーパーバック版の表紙を飾るこの図像は、摂食障害の診断的特徴である身体イメージの歪み(body image disturbance/distortion) を視覚化したものだ。身体イメージの歪みとは、体重や体型に関する「歪んだ」認識を指す言葉である。米国精神医学会によれば、拒食症の名で知られる神経性やせ症／無食欲症を抱えるひとは、自らの身体を「太りすぎていると感じて」おり、このような「歪んだ」認識には「痩身に価値をおく文化および環境」が関係するという(American Psychiatric Association 2013=2014: 334-6)。

こうした精神医学的説明に則れば、摂食障害、特に拒食症の説明の際に頻繁に用いられる『鏡の中の少女』の表紙のような図像は、次のメッセージを発信していると言える。拒食症の少女は、痩せを理想とする文化の影響を受けた結果、自分の体型を「歪んで」認識している。彼女は、図を眺める鑑賞者のような「客観的」な視点から鏡の前に立つ自分の「本当」の姿を捉えられないという、「病的」な状態にあるのだ。ゆえに彼女が「病的」な状態から抜け出すには、治療によって彼女を、「客観的」で「正常」な眼差しの担い手にする必要がある、と。

しかし身体イメージの歪みを視覚化した図像が提示する、「客観的な視点＝正常／罹患者の視点＝病的で逸脱」という「正常／逸脱モデル」は、果たして適切だろうか。美を論じるフェミニズムは、痩せを女性らしさや美しさと結びつける美の基準が、女性に「歪んだ」身体イメージを抱かせ、過剰なダイエットを煽り、摂食障害をもたらすことを明らかにしてきた(Orbach 1986=1992; Freedman 1986=1994; Bordo [1993] 2003)。つまり、文化的に「正常」とされる女性らしさを手に入れようとすればするほど、身体イメージは「歪んで」認識されるのだ(Bordo [1993] 2003: 57)。だとしたら、鏡の前に立つ少女の姿を見る鑑賞者の見方＝「正常」／彼女自身の認識＝「逸脱」とする二項対立は、美の基準それ自体が「客観的」で「正常」な眼差しとして機能する点と、「正常」の追求が「逸脱」した状態をもたらすという矛盾に満ちた構造を、後景化していないか。

またそもそも、ひとが自らの身体を「客観的」に見ることなどできるのか。身体イメージにとって重要な鏡像は左右反転しており、他人から見た鏡の前に立つ自分の姿と一致しない。だとしたら、美の基準という文化的に／それに囚われない精神医学的に「客観的」で「正常」な視点、すなわち＜他者＞の眼差しの中に自らを捉えよというジェンダー規範的／精神医学的な要請は、いずれも根本的に不可能ではないか。

本稿の目的は、摂食障害を題材としたフィクション[1]の代表例として頻繁に挙げられ、1981 年には「拒食症のドラマ(“A Drama of Anorexia Nervosa”)」のコピーと

1　摂食障害を題材としたフィクションには、他にMargaret Atwood, *The Edible Woman*(1969)、Erica Jong, *Fear of Flying*(1973)、Mona Awad, *13 Ways of Looking at a Fat Girl*(2016)などがある。これらはフェミニズムの視点から描かれたものであるが、本稿では摂食障害および身体イメージの歪みに関する精神医学的言説を批判的に再考するために、心理療法士によって執筆された『鏡の中の少女』を扱う。

ともに映像化された『鏡の中の少女』の批判的読解を通じて、身体イメージの歪みの「正常／逸脱モデル」を問い直すことである。そのために、身体イメージ、眼差し、そして欲望の解釈に有効なラカン派精神分析の理論を、既存の精神医学／精神分析による拒食症論とは異なる手法で用いる。美を論じるフェミニズムが批判してきた通り、精神医学言説は摂食障害を、女性らしくあるために痩せて「美しく」なることを要請する社会に対する女性の反応ではなく、個々の女性や家族の「逸脱」した問題として病理化＝周縁化してきた（Orbach 1986=1992; Bordo [1993] 2003）。ラカン派精神分析による拒食症論も同様に、拒食症罹患者は食べないことを通じて物質的に満たすことのできない欠如（無）としての欲望の存在を訴えている、つまり「無を食べている」と説明する（Raimbault & Eliacheff 1989=2012）一方で、美の基準の影響を副次的なものとして周縁化し、それが罹患者の身体イメージにどう影響を及ぼし、どのような欲望を生み出すのかを、積極的に検討してこなかった。従って本稿では、ラカン派精神分析理論に美を論じるフェミニズムの視座を導入した上で、『鏡の中の少女』における「拒食症のドラマ」を読解する。それによって、「正常」とされる＜他者＞の眼差しに潜む、様々な問題点を明るみに出したい。

Ⅱ.「太っている（幻想がある）」から「痩せたい（欲望する）」

『鏡の中の少女』の冒頭、バレエ教室の講師マダム（Madame）に認められることを切望する主人公のフランチェスカ（Francesca）は、レッスン中に「引き締まっていて、スリムで、すらりと」した体型の別の生徒を見つける。すると彼女は、鏡に映る自分を「デブのフランチェスカ」だと感じ、痩せた生徒こそがマダムの称賛に値するのではないかと考えるようになる。そしてマダムに「あと五百グラムほど落として」と指導されたフランチェスカは、マダムに似た、「やせて引き締まっ」た身体になるためにダイエットを始め、摂食障害へと陥る。本節では彼女の否定的な身体イメージに、痩せ理想という美の基準、すなわち＜他者＞の眼差しがいかに関係するのかを紐解きたい。

フランチェスカの否定的な身体イメージは、マダムが代理表象する、痩せを女性らしさと結びつける美の基準によってもたらされたものだ。マダムのように痩せて引き締まった身体は、既存の母親的／家庭的な性役割から解放され、欲望を制御する自己管理力という白人男性中心社会に参入するための権能を備えた新たな女性の象徴として、二十世紀後半以降の西洋を中心に流布した身体像[2]である（Bordo [1993] 2003）。もちろんそのような身体は、厳しい食事制限と恒常的な運動を同時にしなければ到達できないほど極端なものである。しかし美の基準は、いかに極端なものであっても、社

2　80年代に主流化した痩せて引き締まった身体以前には、フラッパーのような直線的な体型（20年代）や、モデルのツイッギー（Twiggy）に似た枝のように細い身体（60年代）が、いずれも既存の女性性から解き放たれた新たな女性の身体像として広まった（大木 2021）。

会からの要求として機能し、「正常」な身体を再定義する（Freedman 1986=1994: 53）。そしてそれは、「身体をどう見るべきか」という指標を提示し、基準に則って外見上の「欠陥」を監視し矯正し続けるよう教える（Bordo [1993] 2003: 57）。つまり美の基準は、あるべき「正常」な身体像だけでなく、文化的に「正常」な身体の見方という規範をも提供するのだ。ゆえにその基準が高ければ高いほど、「正常」に身体を見ることを要請される女性は、自らの身体を否定的に捉えざるを得なくなる（同）。フランチェスカにとって、その眼差しに好ましく映りたいと願うマダムは痩せを「正常」とする美の基準の象徴であり、そのような「正しい」見方こそが彼女に否定的な自己認識を与えたのである。

あるものの見方が身体イメージ、つまり「われわれ自身に身体があらわれる形式」（Schilder 1950: 11）に与える影響は、精神分析の観点からも説明できる。ジャック・ラカン（Jacques Lacan）は、鏡に映る統一された身体像（理想自我）を自分のものとして引き受ける想像的同一化と、鏡像が主体のものだと保証する「客観的」な大文字の＜他者＞の眼差しの地点（自我理想）への象徴的同一化によって主体が形成される過程を、鏡像段階と呼んだ（Lacan 1966=1972, 1973a=2020a）。ただし鏡像を欣喜雀躍しながら引き受ける同一化は、鏡像が＜他者＞にとって「愛するに値する」（白人で、男性で、異性愛者の）ものであることを前提としている（Silverman 1996: 19）。＜他者＞の眼差しは、あらゆる規範が織り込まれた「文化的な眼差し」であるため、鏡像がその眼差しにとって好ましくない、象徴的「批准」を得られないものである場合、主体はそのイメージを受け入れ難いものとして経験する（同: 18-20）。つまり象徴的同一化（自我理想）は、主体の身体イメージ（理想自我）を「必然的に再形成する」（Chiesa 2007: 23）のだ。「デブのフランチェスカ」とは、痩せ理想という文化的に「正常」な＜他者＞の視点への象徴的同一化によって再形成された、＜他者＞の批准に値しない自らの姿なのである。

しかし物語は、「デブのフランチェスカ」という身体イメージが、彼女にしか見えない「幻想」であることを繰り返し強調する。マダムはフランチェスカに体重を落とすよう指導するが、彼女は「スリムなままでいるように」とも言っており、フランチェスカを「太っている」と思ってはいない。バレエ教室の別の生徒は「そんなにやせてる」のだから痩せる必要はないと呟き、母親のグレース（Grace）もまた「一回もデブに見えたことなんてない」と言う。物語にとって、フランチェスカの否定的な身体イメージは、彼女以外の「客観的」な＜他者＞にとって存在しない「誤った」もの、「歪められ」たものなのだ。

しかし精神分析的には、この「誤った」自己認識こそが主体の核である。主体が同一化する鏡像は、主体の身体そのものではなく、左右反転している。ゆえに主体が誤認する鏡像（対自）と、＜他者＞から見た主体の身体（対他）は一致しない（Thévoz 1996=1999: 42）。主体は前提として、自らを「誤って」認識するのだ。しかし対自と対他との「ずれ」がもたらす残余は、主

体に「なぜわたしはあなた［＜他者＞］がわたしだと言うものなのか」（Žižek [1989] 2008: 126）という問いを与える。そこで主体は、自分が＜他者＞の眼差しにどう映るのか、＜他者＞はどのような＜わたし＞を愛するに値するとみなすのか、つまり＜他者＞は何を欲望するのか、その答えを握る＜他者＞の眼差しの所在を探す。ここで喚起されるのは、＜他者＞の欲望の対象になり、＜他者＞と一体化したいという、エディプス的な欲望だ。しかし鏡の前に立つ主体が振り返り、答えを握る＜他者＞の眼差しの方を向いても、それは主体と同じく自らを誤認する特定の誰かの目、「主観」にすりかわり、「客観的」な眼差しは消失する。誰か／何かが眼差しの代役を務めても、眼差しは「最終的にその場所を特定できない」（Silverman 1994: 189）のだ。このことは、主体の存在を保証する＜他者＞が、「不可能で外傷的（トラウマティック）な核、中心的な欠如を軸に構造化」（Žižek [1989] 2008: 137）されていること、つまり根源的に不在であることを示す。

＜他者＞の不在とその眼差しの欠如は、主体の同一性を脅かし、鏡像段階以前に存在したと遡及的に想像される寸断された身体像、つまり死をもたらす＜現実（リアル）＞との遭遇をもたらすが、これを阻止するのが「幻想」だ。幻想は「世界を一貫した意味あるものとして経験するための枠組み」（Žižek [1989] 2008: 138）であり、統一された身体像もここに含まれる（Gallop 1985=2000: 101-2）。ラカンによれば、主体は「『自分を見ている自分を見る』という意識の錯覚」（Lacan 1973a=2020a: 183）によって、＜他者＞の眼差しが「消えゆく存在の点」（同: 182）であるという特徴を覆い隠すという。つまり主体は、「＜他者＞から見た自分」という幻想＝身体イメージを作り出すことで、自らが疎外され、＜他者＞の眼差しと切り離されていること、自らの存在が依拠する＜他者＞が不在だという＜現実＞から目を背けるのだ。この幻想はあくまで錯覚だが、死の恐怖から逃れるためには、主体はそのような（不可能な）象徴的同一化がもたらす「誤った」認識に妥協せざるを得ない。フランチェスカは＜他者＞から見た自身の姿を、「デブのフランチェスカ」という幻想として想像する。この「誤った」認識は、主体にとって不可欠な幻想であるために、精神分析的には何も歪んでいない。

幻想はまた、「永久に欠如している対象として指し示す以外には実在しない欲望対象を、対象*a*の形で」（枝川 2008: 106）結びつける役割を担う。対象*a*とは、欲望の原因－対象を意味する精神分析の概念であり、欠如である＜他者＞の眼差しもここに含まれる。そして対象*a*としての眼差しは、常に欲望に「歪められた」形で具現化される（Žižek 1991: 12）。フランチェスカは、「デブのフランチェスカ」という幻想を抱いた直後、痩せて引き締まった理想の自分の姿に「ケサ（Kessa）」と名付け、それに近づくためにダイエットを始める。その根幹には、マダムに褒められたいという欲望がある。つまり「ケサ」とは、＜他者＞にとって愛するに値する自らの姿であり、＜他者＞の眼差しを具現化したものなのだ。彼女自身の「母親とマダムを重ね合わせ」るフランチェスカにとって、母親的な＜他者＞であるマダムは、スリムで引き締まった「ケ

サ」を愛すべき対象として欲望している。そしてフランチェスカは、「ケサ」になることを通じて、「マダムの身体の中にすっと入」ることを欲望する。この意味で、痩せて「ケサ」になることの根底には、＜他者＞の欲望の対象と同一化し、＜他者＞と一体化したいという、エディプス的欲望があると言える。この本来確認すらできないはずの、＜他者＞が愛する自分の姿＝対象*a*が具現化される舞台こそが、「デブのフランチェスカ」という幻想なのだ。端的に言えば、フランチェスカは「太っている（幻想がある）」から「痩せたい（欲望する）」のである。

この幻想は、「母の代理を探し求めることを可能にする構成物」であると同時に、主体を「母親的な＜物＞へ接近しすぎないよう、そこから距離を保つよう」保護する遮蔽幕（スクリーン）でもある（Žižek [1989] 2008: 134）。「デブのフランチェスカ」という幻想は、＜他者＞の眼差しの具現化としての「ケサ」を生み出すことで、＜他者＞の不在を穴埋めする。なぜなら、「自分は＜客観的＞に太っている、だから痩せて＜他者＞に好ましく映りたい」という幻想に基づく欲望によって、主体が依拠する＜他者＞とその眼差しの存在が仮設され、＜現実＞が遠ざけられるからだ。この意味で、「デブのフランチェスカ」という幻想は、＜現実＞との接近をもたらす欲望を「調整する枠組み」（同: 132）として機能する。

ここで強調したいのは、「ケサ」がマダムという個人ではなく、痩せを「女性らしさ」と結びつける美の基準という＜他者＞の眼差しの具現化だという点だ。物語には痩せ理想の代理表象として、マダムだけでなく雑誌『グラマー（*Glamour*）』のモデル達も登場する。モデル達はフランチェスカに「やせているのは、いいこと」という価値観を伝え、それを受けた彼女はどのモデルより痩せようと決意する。モデル達は、ジェンダー規範に「歪められた」文化的な＜他者＞の眼差しの具現化である。ファッション誌が描き出す非現実的で到底真似できない女性の身体像は、女性をモノとして鑑賞する男性的な視線によって作られ、女性読者にそのような視点から身体を見るように要求するからだ（Rabine 1994: 65）。そして異性愛的な対象として理想化された身体像は、鑑賞者の女性に、欲望対象としての理想の女性を「なることを通して手に入れたい」という、同一化と所有が隣接的な欲望を与える（Fuss 1994: 224）。そこでは同時に、ダイエットやファッションに没頭さえすればモデルのようになれるかもしれないという、「忌まわしい可能性」（Rabine 1994: 66）が切り開かれる。表象が「表象の領野の外にある眼差しを想像するよう誘う」（Copjec 1994: 34）ものだという点を踏まえれば、フランチェスカが目指すモデル達のように痩せた「ケサ」とは、女性に痩せを求める男性／異性愛中心主義的な＜他者＞の眼差しにとって「愛するに値する」自らの姿を、具現化したものと言える。そしてそれは、痩せて「ケサ」になることで＜他者＞の眼差しに好ましく映りたいという決して成就しない欲望に、忌まわしい可能性を与える。

精神分析と美を論じるフェミニズムの視点から解釈すれば、『鏡の中の少女』で描か

れる痩せ理想という美の基準の機能は、次のように言える。それは、男性／異性愛中心主義的に「愛するに値する」「正常」な身体像の提示を通じて、主体に＜他者＞の眼差しを想像させ、その視点（自我理想）から自らの身体を捉え、自らと＜他者＞の根源的な「ずれ」を否定的な身体イメージとして顕在化させることで、「痩せれば＜他者＞の欲望の対象になれるかもしれない」という絶対に成就しない欲望に可能性を与えることだ、と。主体は＜他者＞と同じように自分を見ることも、＜他者＞にとって愛するに値する対象になることもできない。この不可能性は、自らの存在が依拠する＜他者＞の不在がもたらす＜現実＞へと、主体を近づける。このおぞましい瞬間から身を守るには、主体は＜他者＞から見た＜わたし＞という幻想を作り出し、＜他者＞の代理を探し求めることで、自らと同様に＜他者＞もまた欠如であるという＜現実＞を否認しなければならない。存在しないはずの「正常」な＜他者＞の眼差しの代役としての美の基準は、この主体と眼差し、そして欲望の関係を巧みに利用し、不可能な欲望を可能であるかのように見せかける。美が支配的な規範として機能する文化を生きるフランチェスカのような女性にとって、「太っている」という幻想に囚われ、「痩せたい」と欲望することは、＜他者＞の不在を遮蔽するための、主体としての「正常」な反応である。ゆえに、拒食症の女性は自分を「正常」に見られていないという『鏡の中の少女』が繰り返し提示する見解は、そもそもそのような身体の見方が不可能であり、不可能であるからこそ欲望が生まれるという意味で、見当違いと言わざるを得ない。

Ⅲ.「痩せたい（欲望）」から「痩せ続けたい（欲動）」へ

ダイエットの結果、フランチェスカはマダムに褒められる。一方グレースに「異常なほどやせて」いると心配された彼女は、かかりつけ医師のゴードン（Gordon）の診察を経て、拒食症の可能性を提示される。やがてフランチェスカは、心理療法家のサンディ・シャーマン（Sandy Sharman）から拒食症の診断を受け入院するが、それでも痩せることを止めない。本節では摂食障害の特徴でもある、美しさや「女性らしさ」を追い求めてダイエットを始めた女性が「そのうち痩せることそれ自体が目的とな」（Freedman 1986=1994: 250）り、やがて病理化される過程と、欲望との関係を読み解く。

フランチェスカに拒食症の可能性を見出すゴードンは、グレースにいくつかの病因論を提示する。そのひとつは、フランチェスカが無月経であることに基づく、成熟／女性性の拒絶説だ。この説は「特に拒食症に関する説明で多く見られる」（中村 2011: 32）ものであり、そこで罹患者の拒食は身体的な成熟に対する否定的態度として解釈される。作中でフランチェスカは、過去に月経が始まり身体に変化が訪れた時に抱いた違和感を回想する。ただし彼女は、ゴードンに指摘されるまで「生理のことなんて忘れて」おり、逆に無月経が原因でダイエットを制止されたことに対して憤り、「意志の力で生理を来させるようにはできないの」かとさえ考える。彼女は、身体的

な成熟や女性性を拒否するために痩せたい訳ではないのだ。

特筆すべきもう一つの病因論は、痩せ理想の影響だ。ゴードンはグレースに、「社会全体が女性たちに、魅力的であるためにはやせこけていなければいけない、と言いつづけている」と伝える。成熟／女性性の拒絶説と痩せ理想の影響という一見相反する病因論の共存が示すのは、ダイエットによって「女性的な美しさを執拗に追求」した女性が、「皮肉にも生殖能力のない人間になってしまう」という矛盾だ（Freedman 1986=1994: 245）。確かにフランチェスカは「女性的」な特徴が削ぎ落された身体になるが、それは「誰よりも細く美しくなることによって、女性らしさを演じること」（同: 246-7）の結果なのである。

しかし物語は、痩せ理想という規範を問い直すのではなく、フランチェスカの痩せの追求を「逸脱」したものとして病理化する方向へと向かう。ここで興味深いのは、彼女が痩せ続け、病理化される過程で、次第に「デブのフランチェスカ」という幻想が薄れていく点である。体重を減らし、マダムに褒められ、『グラマー』のどのモデルよりも痩せたフランチェスカは、父親のハロルドに「ガリガリじゃないか」と言われた際、「今のままの外見が好き」と反論する。彼女はもはや、自らを「デブ」だとは感じていない。しかし、「ケサ」になることを達成したかのように思えるフランチェスカは、バレエを辞めさせられ、マダムとの接点を失ってもなお、痩せることを止めず、やがて入院する。その過程で彼女は、「ぜい肉の恐怖」、つまり体重が増えることへの不安を強く示すようになる。

この「ぜい肉の恐怖」は、精神分析的な「不安」として解釈できる。不安は、「鏡像に起源を持つ理想自我 $i(a)$ をまさしくかき乱すものとしての欲望対象と関わりを持」（Lacan 1991=2015: 256）ち、「欲望の消失によってもたらされる」（Žižek 1991: 8）。しかし不安は、主体と「欲望との関係が維持される根源的様式」でもあり、それによって主体は「たとえ耐えがたい（アンストゥナブル）仕方によってであれ、欲望への関係を保持（ストゥルーニ）し続ける」（Lacan 1991=2015: 257）。フランチェスカは、その成就によって消失しつつある「ケサ」という欲望の原因－対象との関係、つまり「痩せたい」という欲望を維持するために、不安を抱いていると言える。なぜなら欲望の本質は、「欲望それ自体を持続させることであり、その成就という恐ろしい瞬間を延期すること」（Žižek 2004）だからだ。前節で確認した通り、欲望の原因－対象である対象 a は、＜他者＞の眼差しを具現化したものであると同時に、その不在を穴埋めするものでもある。逆に言えば、欲望が成就し、その原因－対象が消えれば、主体は＜他者＞の不在と再び遭遇するのである。ゆえに主体は、欲望を叶わぬままにしておくことで、その原因－対象を維持し、＜他者＞の欠如に蓋をし続けなければならない。不安は主体と欲望との関係を整え、＜現実＞を遠ざけるという意味で、幻想と似た役割を持つ。つまり「デブのフランチェスカ」が薄れるにつれて現れた、「素敵な骨っぽい身体じゃなくなってしまう」ことへの不安、「ケサ」という欲望の原因－対象の消失への不安は、逆に「痩せた

い」という欲望を維持し、その成就がもたらす＜現実＞との遭遇を延期するのだ。換言すれば、彼女の欲望は「ケサ」になることではなく、「ケサ」になりたいと欲望し続けることなのである。

しかしフランチェスカが不安によって維持する欲望がもたらす身体は、「異常」なほど痩せ衰えたものであり、周りの人々には「飢え死にしようとしてる」ようにさえ見える。このフランチェスカの拒食と羸痩状態の身体は、死の欲動として捉えられる。死の欲動とは、「命のない死んだ物体にみずからを戻そうとする」（福原 1998: 203）運動を意味するフロイトの概念である。それはおぞましく、象徴的秩序を混沌に導くものであるため、死の欲動を弄び、享楽することは固く禁じられる。拒食症の身体はしばしば「第三者にはぞっとするような気味の悪いもの」（Orbach 1986=1992: 215）に映るが、フランチェスカの身体と拒食もまた、おぞましい死の欲動を喚起するものとして描写される。それが象徴的秩序を乱すものであるために、彼女は病理化される。

ただしラカンが説明する通り、欲望の原因－対象である対象 *a* は、「欲動の対象」（Lacan 1973b=2020b: 272）でもある。スラヴォイ・ジジェク（Slavoj Žižek）は死の欲動を享楽する主体について、「死の欲動としての真の性質が暴かれるまさにその最後まで〔欲望を〕突き通す」（Žižek 1991: 63）存在だと説明する。つまり欲望は、その原因－対象の執拗な追及によって、死の欲動であることが暴かれる宿命にあるのだ。前述の通り、欲望の追求の先には＜他者＞の欠如しかない。欲望の本質は、それを突き詰めた先に「無」だけが訪れる、死の欲動である。つまり欲動とは、＜他者＞の欠如がもたらす死から目を背けようと、欲望の成就を延期し続けた結果訪れる、象徴的なものとしての欲望の限界なのだ。フランチェスカは「ケサ」になりたいという欲望の成就を不安とともに延期した結果、皮肉にも死の欲動に接近した。しかしこれは「誰よりも細く美しくなること」（Freedman 1986=1994: 246-7）が要求される文化において、当然の結果である。彼女は文化的に「受け入れられる」理想の痩せた身体を追い求めた（＝＜他者＞の欲望の）先に、羸痩状態の「受け入れられない」身体（＝死の欲動）しかないという、痩せ理想がもたらす欲望の矛盾を浮き彫りにしているだけなのだ。

フランチェスカが欲望の成就の延期によって死の欲動へ近づく様子は、彼女が入院先の病院で出会うマーナ（Myrna）との関係からも読み取れる。「拒食症のプロ」を名乗るマーナは、病院食を盗み隠し、気晴らしに食べた後には嘔吐し、病院内を動き回ることで体重を管理する。フランチェスカはマーナを「気持ち悪い」と表現する一方で、次第にマーナの行動の一部を模倣するようになる。前節で確認した通り、欲望は常に＜他者＞の欲望として生じる。そして欲望の成就の延期は、その対象が別の対象に移り変わることによってもなされる（Žižek 2004）。フランチェスカの欲望は、その成就の延期の過程において、マダムやモデルたちの欲望の対象から、マーナの欲望の対象へと移ったのである。

しかしマーナの望みは、痩せることでは

なく、拒食症であり続けることにある。彼女は極度の低体重を維持しつつも、高カロリー輸液を拒否するために「どの検査も正常値に」するなど、文字通りの現実を越境する。また彼女は、「ケサみたいな恐怖を感じているようには見えなかった」。マーナには＜他者＞の欠如に、死に接近することに対する不安がないのだ。この意味でマーナは欲望する主体というより、拒食症であり続けること、つまり死に隣接しながらも生き続ける欲動に快楽を見出す、享楽する主体である。フランチェスカは欲望の成就の延期を通じて、欲望の対象ではなく欲動の対象を目指すようになったのだ。

一方でフランチェスカは、同室に入院する少女ライラ（Lila）に「マーナと同じ」と言われてもなお、「わたしはマーナじゃないわ」と、自らが死の欲動に近づいていることを認めず、太ることへの不安を抱き続ける。この「根源的に失われた対象を取り戻そうとしながら、それがはらむ死への傾きのことは懸命に忘却しておこうとする」（福原 1998: 206）態度、つまり＜現実＞からの逃避を可能にするのは、幻想であり、不安である。マーナの欲動の対象を欲望するフランチェスカは、太ることへの不安を抱き、自分がマーナのような享楽の主体であることを認めないことで、「痩せ続けること」という欲望を、欲望のまま保つ。換言すれば、フランチェスカが抱く太ることへの不安とは、自らの欲望が依拠する＜他者＞の眼差しが欠如であるという＜現実＞から目を背けるための、防衛なのだ。

フランチェスカの身体がいかに象徴的秩序を乱す、おぞましく「逸脱」した姿であっても、それをもたらすのは、美の基準という「正常」な眼差しが喚起する、＜他者＞にとって愛するに値する対象になりたいという成就不可能な欲望である。その眼差しを具現化した痩せて「女性らしい」身体は、あくまで欠如である＜他者＞の眼差しに形式を与え、その欲望の追求の先に訪れる＜現実＞との遭遇を穴埋めする蓋に過ぎない。ゆえにその欲望を突き詰めた先には、死の欲動しか待ち受けていない。フランチェスカは＜他者＞にとって好ましい、文化的に「正常」な身体を追い求めた先に、羸痩状態の、死の欲動のような「逸脱」した身体しかないという、美の基準が喚起する欲望の矛盾を浮き彫りにしている。物語はしかし、「正常」の追求が「逸脱」をもたらすという矛盾した文化規範を問い直すのではなく、フランチェスカを「歪んだ」幻想、欲望、不安に囚われた拒食症罹患者として病理化し、彼女を治療する方向へと舵を切る。

Ⅳ.「痩せるのを諦めろ」（汝の欲望）

『鏡の中の少女』の後半では、摂食障害を専門とする心療内科医のシャーマンによる治療がおこなわれる。彼はフランチェスカに繰り返し言う――「体重に対する強迫観念はきみの本当の問題じゃない」と。彼にとって痩せ理想によってもたらされた幻想と欲望、そして不安は、「本当の問題」ではないのだ。本節では、「知を想定された主体」としてのシャーマンがフランチェスカの欲望＝欲動を断念させる過程を読み解き、そこで浮上する「正常」な眼差しの矛盾した性質を明らかにする。

シャーマンは入院先の病院にフランチェスカの家族を招集し、彼女が拒食症になることで「これまでの人生の中で絶対なかったほどの関心を集め」たと言い、家族が彼女に関心を向けない限り「ケサが回復して健康な少女にもどる可能性はありません」と告げる。シャーマン曰く、フランチェスカは家族に「愛されたいと望んで」おり、拒食という「危険を犯して自分の欲求を表現」しているという。

シャーマンはフランチェスカとその家族に、そして読者にも、それまでのページに散りばめられてきた様々な細部に対する、統合的な意味を与える。作中では、両親に対するフランチェスカの不満が随所に描かれる。それらは読者にとって、彼女が痩せ続け、太るのを恐れることとの関係が不明瞭な、断片に過ぎない。そうした断片を彼女の拒食の「本当」の原因として提示するシャーマンの役割は、「知を想定された主体」として解釈できよう。精神分析による治療の過程では、「知を想定された主体」としての分析者が、患者の治療の過程における転移の対象、つまり象徴的同一化の対象としての＜他者＞の代役を務める。そこで重要なのは、患者の症状に「本当」の意味や答えを与えることではなく、＜現実＞に接近した患者の外傷に理解可能な形式、あるいは物語／虚構という幻想を遡及的に組織化し、＜現実＞を再び抑圧することで、「正常さ」を再確立することだ（Žižek 1991: 58）。シャーマンは登場人物と読者に、フランチェスカは家族に愛されることを欲望しており、注目を集めるために拒食症になったのだという、遡及的に生成された理解可能な欲望の物語、すなわち新たな幻想を、彼女の「本当の問題」として提供する。

この物語／虚構の提供と同時に、「知を想定された主体」としてのシャーマンは、フランチェスカにとっての理想的父の役割を果たす。フランチェスカは治療の過程で、次第にシャーマンを、自らが抱える不安を「知る」存在とみなし、「サンディ〔シャーマン〕がパパなら、どんなにいいだろう」と想像する。精神分析にとって、理想的な父としての「知を想定された主体」の役割は、主体の欲望の答えを「知る」絶対的な＜他者＞として立ち現れることだ。シャーマンはフランチェスカに、繰り返し「きみはやせすぎてて、みんながそう思ってるのに、どうしてきみだけがそう見えないんだろうね」と言う。ここでシャーマンは、不在の＜他者＞の眼差しの代役を務め、フランチェスカが「客観的」な＜他者＞にどう見えるのかという問いに対する、答えを与える。そしてフランチェスカは、シャーマンが提供する家族に「愛されたい」という幻想に基づく欲望を受け入れた後に、「突然、両親や医者たちやみんなが言っていたように、ケサは自分が醜くく〔原文ママ〕見えてきた」と感じるようになる。

ここで理想的父としてのシャーマンがおこなったことは、「欲望という審級と、達成すべき義務の様式の上に欲望を秩序付ける＜掟＞とを集める」（Chemama & Vandermersch 1998=2002: 315）＜父の名＞を打ち立てることである。＜父の名＞とは、母親的な＜他者＞の欲望の対象になり＜他者＞と一体化したいというエディプス

的な欲望＝欲動、つまり享楽を禁止する法である（Žižek 1991: 24）。「デブのフランチェスカ」という幻想に基づく「ケサ」になりたいという欲望は、痩せることで＜他者＞の欲望の対象に同一化し、＜他者＞と一体化したいという、根本的に不可能な欲望であった。そしてその欲望は、執拗な追求の結果、主体を＜他者＞の不在という＜現実＞へと近づける、死の欲動であった。シャーマンが与える＜父の名＞は、幻想を突き破り享楽の主体と化したフランチェスカに、家族に「愛されたい」という幻想に基づく欲望と、＜他者＞から見た彼女の姿に答えを与えることで、死をもたらす母親的な欲望をおぞましきものとして「棄却」（Kristeva 1980=1984: 20）させ、フランチェスカを象徴的な秩序に従わせる。つまり理想的父としてのシャーマンは、フランチェスカにとっての＜他者＞となり、彼女に＜他者＞の視点への不可能な象徴的同一化を「達成」させ、＜父の名＞が司る秩序に基づく新たな幻想と欲望を与えることで、太ることへの不安と＜他者＞の欲望の対象になりたいというおぞましい欲望＝欲動を断念させたのだ。

ただし最も重要なのは、最終的に「知を想定された主体」という＜他者＞が、「知っていると想定されていながら実は何も知らない主体」（Lacan 1973b=2020b: 322-3）であることを主体に受け入れさせる、つまり理想的父の「死」によって転移を解消し、＜父の名＞の法を内面化させることにある点だ。シャーマンは自分の役割を「きみが実際にどんなふうに見えるのか、言う必要があるときに言うことだけだ」と説明し、フランチェスカの不安と欲望が「逸脱」であることを強調する。ここで暗示されるのは、「言う必要が」ない時、つまり彼女が幻想を突き破り死の欲動に近づいた時以外には、彼は＜他者＞の代役を務めないということである。彼は「みんながそう思ってる」と言う一方で、彼にとってフランチェスカがどう映るかは口にしない。フランチェスカが言う通り、彼は彼女に痩せることを止めさせる以外、「なんにもさせやしない」のである。そしてフランチェスカは最終的に、「わたしが、いつも、あなたに答えを教えてもらわなくちゃならないんだったら、わたしは本当には良くならない」と、＜他者＞から答えを得ることを断念する。ここでフランチェスカは、理想的父としてのシャーマンを手放し、＜他者＞の＜他者＞はいないこと、つまり自分が＜他者＞にどう見えるのかを知る全能の存在などいないことを、受け入れる。この理想的父の死は、象徴的審級の無化を意味しない。＜父の名＞は、その死によってのみ、絶対的な法として内面化されるからだ（Žižek 1991: 24）。シャーマンは、「他者のために（対他的に）ある役割を演じているものとして自らを経験する」（Žižek 1989 [2008]: 118）フランチェスカにその「＜対他＞とは＜対自＞だと」（同: 118）理解させ、＜他者＞の眼差しと一体化したいという不可能な欲望を手放させることで、象徴的委託を引き受けさせる。換言すれば、フランチェスカを「逸脱」した存在として病理化し、「客観的」に、「正常」に自らを見よと命令する「知を想定された主体」としてのシャーマンの役割とは、矛盾しているようではあるが、欺

瞞に満ちた鏡像を自身のものとして受け入れ、その背後にある＜他者＞の眼差しを想像し「正常」に自らを見ることを断念しろという禁止の法を、フランチェスカに内面化させることなのである。

「逸脱」した少女を「正常」に治療する『鏡の中の少女』の「拒食症のドラマ」は一方で、そもそも＜他者＞の眼差しに好ましく映りたいという不可能な欲望に忌まわしい可能性を与える美の基準の問題に目を向けない。第二節で確認した通り、「あるべき女性の身体像」を作り出す美の基準は常に＜他者＞の眼差しを喚起し、「このような身体になればあなたは＜他者＞に愛される」と教え続ける。一方で精神医学的言説は、美の基準がもたらす幻想と欲望を「逸脱」として病理化し、それを断念させる。つまり『鏡の中の少女』には、＜他者＞の欲望を欲望することを「正常」とするジェンダー規範と、そのような欲望の断念を「正常」とする精神医学的規範という、二つの象徴的規範が混在しているのである。＜他者＞の眼差しに一体化したい、＜他者＞にとって愛するに値する対象になりたいという欲望が、根本的に断念せざるを得ないものなら、そのような欲望を可能なものとして再演する原因－対象としての美の基準を問い直さなければ、否定的な身体イメージに起因する病の根本的な問題解決には繋がらないだろう。結局のところ、『鏡の中の少女』の「拒食症のドラマ」が描き出すのは、「自らの身体を正しく見ろ／見るな」という矛盾する二つの象徴的規範によって引き起こされる問題が、「ある拒食症の少女の病理」という単元に矮小化され、後景化される過程なのである。

Ⅴ．おわりに

本稿では『鏡の中の少女』をフェミニズムと精神分析の立場から読み解くことで、「客観」や「正常」と呼ばれるものの見方を問い直すことを目指した。ひとが「客観的」に自分の身体を見ることはできない。しかし象徴的に「正常」な眼差しとしての美の基準は、それに晒された女性に否定的な身体イメージという幻想を与え、「痩せて＜他者＞の批准を得たい」という成就不可能な欲望に、可能性を与える。著しく痩せた身体が理想とされる文化において、その欲望の追及の先には、死の欲動のような、羸痩状態の身体しかない。しかし象徴的秩序は、その内部で喚起された欲望が欲動としての性質を露呈する時に、主体を「歪んだ」、「逸脱」した存在として病理化し、＜他者＞の眼差しを断念するように「治療」する。この過程において、そもそも「ひとの目から見る」ことを可能であるかのように見せかけ、主体に否定的な身体イメージと絶対に成就しない欲望を与える「正常」な眼差しとしての美の基準の問題点は、後景化される。

だからこそ、本作の表紙が伝えるような「正常／逸脱モデル」は、見直す必要がある。「客観的」で「正常」な眼差しで自分を見られる主体はいない。そのような眼差しから自分の身体を見ようとすればするほど、（あえてこの表現を使うが）「病む」のだ。身体イメージの歪みを可視化した図像が依拠する「正常／逸脱モデル」は、それ自体が「客観的」に身体を見よという不可能な欲望の再演にしかならず、そのような眼差し自体の問題点を後景化する。ゆえに

否定的な身体イメージに起因するあらゆる病の根幹に挑むには、まずそれを生み出す「正常」なものの見方自体の不可能性を丹念に紐解く必要があるのだ。本論で示した精神分析と美を論じるフェミニズムの手法がその手助けとなると、わたしは信じている。

「客観的」で「正常」な眼差しの中に自らを捉えられるひとなど存在しないのなら、次のように言えるだろう。身体イメージの歪みを抱えるとされるひとは、「やりすぎて」いるかもしれない。彼女たちの姿や行動は、おぞましいかもしれない。しかしそのような「逸脱」は、「客観的」で「正常」なものの見方の、根本的な不可能性を示している。この意味で、「歪んで」いるのは、彼女たちの身体イメージではなく、「客観的」に自分を見ることを可能であるかのように見せかけ、またそれを要請する、「正常」な眼差しの方である、と。

付記

本文引用は『鏡の中の少女』（杵渕幸子・森川那智子訳, 1987年, 集英社文庫）に拠る。最後に、本論文に大変的確なコメントをくださった査読者の方々に厚く感謝申し上げます。

参考文献

American Psychiatric Association, 2013, *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: DSM-5*.（日本精神神経学会監修 , 髙橋三郎・大野裕監訳 , 2014,『DSM-5 ――精神疾患の診断・統計マニュアル』医学書院）.

Bordo, Susan, [1993] 2003, *Unbearable Weight: Feminism, Western Culture, and the Body*, Tenth Anniversary Edition, Berkley, Los Angeles, and London, University of California Press.

Chemama, Roland, and Bernard Vandermersch, eds, 1998, *Dictionnaire de la psychanalyse*, Larousse Bordas.（小出浩之・加藤敏・新宮一成・鈴木國文・小川豊昭訳, 2002,『新版　精神分析辞典』弘文堂）.

Chiesa, Lorenzo, 2007, *Subjectivity and Otherness: A Philosophical Reading of Lacan*, Cambridge, Massachusetts, London, and England, MIT Press.

Copjec, Joan, 1994, *Read My Desire: Lacan against the Historicists*, Cambridge, Massachusetts, London, and England, MIT Press.

枝川昌雄, 2008,『ラカン空間を読む』青山社.

Freedman, Rita, 1986, *Beauty Bound*, Lexington Books.（常田景子訳, 1994,『美しさという神話』新宿書房）.

福原泰平, 1998,『ラカン――鏡像段階』講談社.

Fuss, Diana, 1994, “Fashion and the Homospectatorial Look”, In Shari Benstock and Suzanne Ferris eds., *On Fashion*, New Brunswick and New Jersey, Rutgers UP.

Gallop, Jane, 1985, *Reading Lacan*, Cornell UP.（富山太佳夫・椎名美智・三好みゆき訳, 2000,『ラカンを読む』岩波書店）.

Kristeva, Julia, 1980, *Pouvoirs de l’horreur. Essai sur l’abjection*, Éditions du Seuil.（枝川昌雄訳, 1984,『恐怖の権力――＜アブジェクシオン＞試論』法政大学出版局）.

Lacan, Jacques, 1966, *Écrits*, Éditions du Seuil.（宮本忠雄・竹内迪也・高橋徹・佐々木孝次訳 , 1972,『エクリⅠ』弘文堂）.

————. 1973a, *Le séminaire de Jacques Lacan, Livre XI: Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse 1964*, Jacques-Alain Miller ed, Éditions du Seuil.（ジャック＝アラン・ミレール編, 小出浩之・新宮一成・鈴木國文・小川豊昭訳 , 2020a,『ジャック・ラカン　精神分析の四基本概念【上】』岩波文庫）.

————. 1973b, *Le séminaire de Jacques Lacan, Livre XI: Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse 1964*, Jacques-Alain Miller ed, Éditions du Seuil.（ジャック＝アラン・ミレール編, 小出浩之・新宮一成・鈴木國文・小川豊昭訳 , 2020b,『ジャック・ラカン　精神分析の四基本概念【下】』岩波文庫）.

————. 1981, *Les psychoses: Le séminaire de Jacques Lacan, Livre III*, Jacques-Alain Miller ed, Éditions du Seuil.（ジャック＝アラン・ミレール編, 小出浩之・鈴木國文・川津芳照・笠原嘉訳, 1987,『ジャック・ラカン　精神病【下】』岩波書店）.

———— 1991, *Le Séminaire de Jacques Lacan: Livre VIII, Le Transfert 1960-1961*, Jacques-Alain Miller ed, Editions du Seuil.（ジャック＝アラン・ミレール編 , 小出浩之・鈴木國文・菅原誠一訳 , 2015,『ジャック・ラカン　転移【下】』岩波書店）.

Levenkron, Steven, 1978, *The Best Little Girl in the World*, Contemporary Books.（杵渕幸子・森川那智子訳, 1987,『鏡の中の少女』集英社文庫）.

中村英代, 2011,『摂食障害の語り――＜回復＞の臨床社会学』新曜社.

大木龍之介 , 2021,「スキニーな身体を読み直す―――西洋視覚文化における痩せに対する受容の変化」『中京英文学』（中京大学英米文化・文学会）第41号：pp. 25-56.

Orbach, Susie, 1986, *Hunger Strike: The Anorectic's Struggle as a Metaphor for Our Age*, W. W. Norton & Company.（鈴木二郎・天野裕子・黒川由紀子・林百合訳, 1992,『拒食症――女たちの誇り高い抗議と苦悩』新曜社）.

Rabine, Leslie W, 1994, "A Woman's Two Bodies: Fashion Magazines, Consumerism, and Feminism", In Shari Benstock and Suzanne Ferris eds., *On Fashion*, New Brunswick and New Jersey, Rutgers UP.

Raimbault, Ginette, and Caroline Eliacheff, 1989, *Les indomptables; Figures de l'anorexie*, Odile Jacob.（加藤敏監修 , 向井雅明監訳 , 佐藤鋭二訳 , 2012,『天使の食べものを求めて――拒食症へのラカン的アプローチ』三輪書店）.

Schilder, Paul, 1950, *The Image and Appearance of the Human Body: Studies in the Constructive Energies of the Psyche*, New York, International UP.

Silverman, Kaja, 1994, "Fragments of a Fashionable Discourse", In Shari Benstock and Suzanne Ferris eds., *On Fashion*, New Brunswick and New Jersey, Rutgers UP.

————. 1996, *The Threshold of the Visible World*, New York and London, Routledge.

Thévoz, Michel, 1996, *Le Miroir Infidèle*, Les Éditions de Minuit.（岡田温司・青山勝訳 , 1999,『不実なる鏡――絵画・ラカン・精神病』人文書院）.

Žižek, Slavoj, 1991, *Looking Awry: An Introduction to Jacques Lacan through Popular Culture*, Cambridge, Massachusetts, London, and England, MIT Press.

————. 2004, "From Desire to Drive: Why Lacan Is not Lacaniano", *Livejournal*, (Retrieved January 10, 2023, https://zizek.livejournal.com/2266.html).

————. 2006, *How to Read Lacan*, New York and London, W. W. Norton & Company.

————. [1989] 2008, *The Sublime Object of Ideology*, London and New York, Verso.

（掲載決定日：2023年5月18日）

Abstract

Psychoanalyzing "A Drama of Anorexia Nervosa": Body Image Disturbance, Gaze, and Desire in Steven Levenkron's *The Best Little Girl in the World*

Ryunosuke Oki*

This paper provides a feminist-psychoanalytic reinterpretation of body image disturbance/distortion (BID), a diagnostic characteristic of anorexia nervosa. I analyze Steven Levenkron's best-selling novel on eating disorders, *The Best Little Girl in the World* (1978), which was adopted into a television film in 1981 with a promotional copy, "A Drama of Anorexia Nervosa." The novel, as well as popular representations of eating disorders, portrays an anorectic girl whose body image is distorted and who cannot perceive herself objectively and normally. However, if beauty standards—as feminists point out—function as the culturally objective and normalized gaze, and if any subject—as Jacques Lacan theorizes—is fundamentally destined to fail in perceiving one's body objectively, the dichotomy between a clinically objective "normal" look and an anorectic's pathological "deviant" perception becomes dubious. Therefore, this reading of *The Best Little Girl in the World* adopts the perspectives of feminist discussions on beauty standards along with Lacan's conceptions of identification and desire. By deciphering how the protagonist's body image disturbance and her desire to be thin emerge in relation to the Other, I endeavor to highlight the problems and distortions in the culturally "normal" gaze.

Keywords
eating disorders, anorexia nervosa, body image, psychoanalysis, *The Best Little Girl in the World*

* Instructor, Sugiyama Jogakuen University